

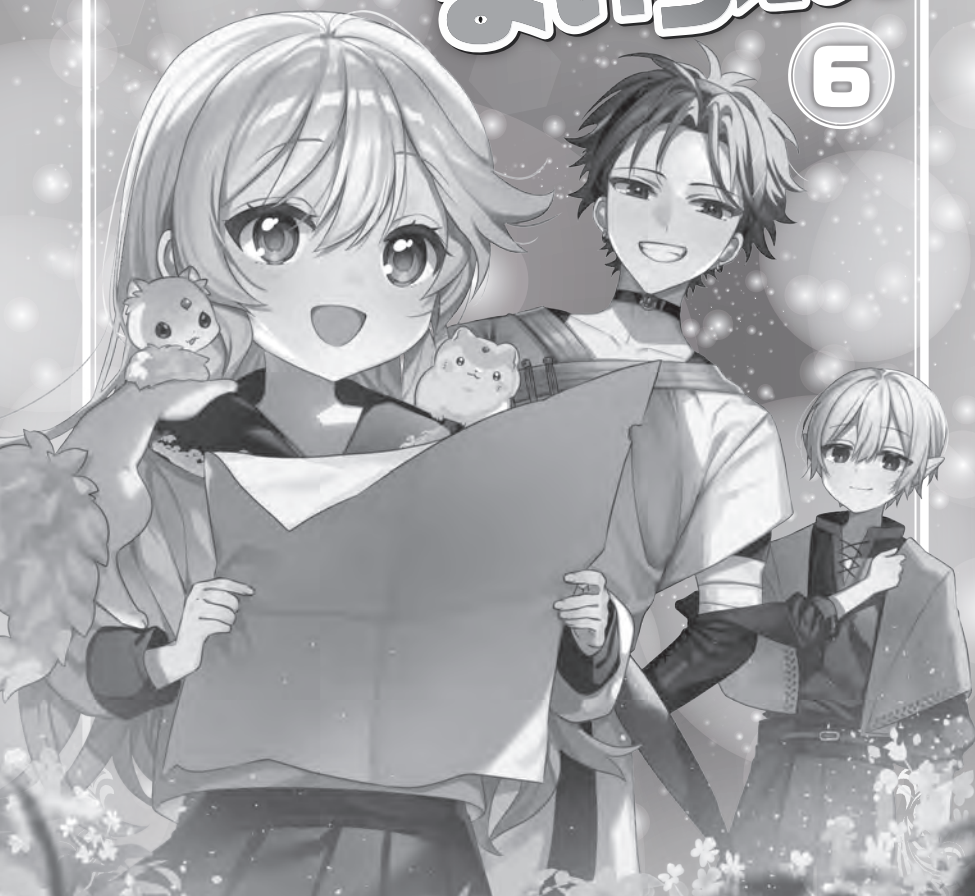
転生幼女は未読びチート

異世界

ゴーイング
まいろえい

Going
My Way

6



高木 コン

Kon Takagi

ルフス

ネラース

ニヴェス

アクラン

グレウス

クラオル

エルミス&
プルトン

セナと契約している
水と闇の精霊。

カルリーノ・タルゴー

タルゴー商会の会長で
貴族の女性。
少し抜けているものの、
善良かつ商魂逞しい。

ジルベルト

セナに救われ、
彼女を崇拜しつつ
共に旅をしている少年。

グレン

人型にもなれる
エンシェンドラゴン
古代龍。
セナを気に入っている。
よく食べ、よく遊び、
よく戦う。

セナ

元・三十路OLで
現在はチート能力持ち幼女。
恩人と再会するため
大事な仲間たちと
新たな土地へ旅立った。

登場人物

CHARACTER

第0話 これまでの話

神のミスで消滅した私はエールデテールの世界に降り立った。危険な呪淵の森を記憶喪失で彷徨っていた私を保護してくれたのはアプリークム国から来ていたガルドさん、ジュードさん、モルトさん、コルトさんの四人からなる【黒煙】のパーティ。いろいろあつてガルドさん達とは離れ離れとなり、私はキアール口国のカリダの街の騎士団にお世話になることに。記憶は取り戻したものの、ブラン団長、フレディ副隊長、パプロさんの三人に過保護を發揮され、苦勞らしい苦勞などではない。何故か神様にも気に入られ、エアリルパパ、アクエスパパ、イグ姐、ガイ兄と呼ぶ四人に、大層可愛がってもらっている。

古代龍のグレンと従魔契約をしたことで国王陛下に呼び出しをくらい、キアール口国の王都へ。異世界モノあるある通り、ここでもいろいろあつただけ……一番の出来事は家族が増えたことだろう。今では呪淵の森から一緒にいてくれるクラオルを筆頭に、グレウス、青い精霊のエルミス、黒い精霊のプルトン、精霊帝のウエヌス、蜘蛛のポラル、人化しているグレン、家事妖精のキヒター、黒豹のような子猫のネラース、ぬいぐるみのような水色子グマのアクラン、文鳥サイズスの火の鳥のルフス、ミニ秋田犬のニヴェス、そして行動を共にすることになったハイエルフのジル

ベルト君……という大所帯となった。普段はネラーズ達は影の中だし、ウエヌスとキヒターは離れて生活しているんだけどね。

王都で起きた問題も解決し、ようやく観光しつつガルドさん達捜しの旅に出られることになったところである。

第一話 旅立ち

ブラン団長達とのお世話になりました。パーティーの次の日を丸一日最終準備に充て、バタバタと慌ただしく過ごした。

今日は夜明け前に起こしてもらい、急いで準備したら出発だ。

昨夜ブラン団長達への感謝の手紙を書いたので、出発前にブルトンに頼んでブラン団長の部屋に置いてきてもらった。しみりした別れになったら絶対泣いちゃう自信があるから、ブラン団長達には旅立つ日を教えなかったんだよね。なので手紙にはそのことについての謝罪も書いてある。

夜明けと同時に王都の門から外に出て、少し離れた場所で新しく従魔契約をしたネラーズ達を影から呼ぶ。

「みんな、出発だからよろしくね」

私の声に、元気に返事をしてくれる可愛いモフモフ達。

今日は初日なので、馬車を出さずに通常サイズに戻ったネラーズ達の背中に乗せてもらうつもり。通常サイズに戻った姿を見て、私が大興奮したのは言うまでもない。わしゃわしゃと撫でまわし、抱きついてモフモフを堪能させてもらった。けしからんくらい素晴らしいモフモフでした。

私は黒豹っぽいネラーズ、ジルベルト君は水色グマのアクラン、グレンは秋田犬そっくりなニヴェスの背中へ。火の鳥のルフスには上空からの偵察をお願いした。

初めての騎乗スタイルに緊張しつつ乗せてもらったんだけど、特に落ちそう……なんてことはなく安定していた。一応毛を掴ませてもらったものの、急な方向転換とかがなければ掴まなくても大丈夫なくらいだった。

ゆっくりめに走ってもらって、目指すはルート上で一番近い村だ。

『主様、本当に別れの挨拶しなくてよかったの?』

「うん。挨拶したら離れがなくなっちゃう気がして……私のワガママだよ。手紙にも書いたけど、このワガママも許してもらえたらいいな」

クラオルは何も言わず頬にスリスリしてくれて、それがまた心にク。泣かないようにと自分本意で挨拶しなかったのに、目尻からこぼれた涙が風に乘って散っていった。

しばらく走ってもらったら、遅めの朝ご飯兼、休憩時間だ。

買足したファミリアサイズのテーブルとイスを草原に出し、焼きおにぎりとキュウリの酢なし浅漬けとお味噌汁をみんなと食べる。もちろんネラーズ達も一緒である。契約すると食事は嗜好品と同列扱いになるらしいからか、私が全員分用意したことに驚いていたけど、喜んで食べていた。

日本の味はホッコリと心に沁みる。今さら自己嫌悪に陥っていた私も落ち着けた。ギルドのある街に着いたら改めて謝罪と報告のお手紙を出そう。

〈やはり外はいいな！〉

「そうだねえ。ずっと街の中にいたもんね」

グレンはずっと王都にいてストレスが溜まっていたみたい。思いっきり伸びをしている。〈うむ。これで魔物でも出てくれたら暴れられるんだがな〉

「狩りに行ってもいいよ？」

〈ムッ。我はセナと共にいるぞ〉

「みんなと一緒にだから大丈夫なのに、心配性だなあ」

食休みに少しゆっくりしたら出発だ。私も戦うのは久しぶりだから、ちよつと弱めな魔物で感覚を取り戻したいところ。あれ？ 取り戻したいって言うほど戦っていない気もするな……？

ネラースの背中揺られつつ魔物の気配を探していると、とある事実に気が付いた。

「ねえ、クラオル。魔物さ、いるにはいるんだけど避けられてるっぽいよ。私達がある程度近付くと逃げてく」

『ああ……理由がわかったわ。お昼ご飯のときに説明するから、お昼までは安全よ』

クラオルがそう言うならと、今は気にしないことにした。

グレンもそうだけど、ポラルもテンションが高い。精霊達も気持ちよさそうに飛んでいる。ずっと王都にいたからクラオルもグレウスも森が恋しいでしょう。途中からコテージでもゆっくりして

いなかっただもんね。おそらく、本人達も無意識のうちにフラストレーションが溜まっているんだろ。うな。みんなはいつも私を気遣ってくれるのに……甘えすぎだ。しっかり周りを見なければ。

ちよつど休憩によさげな大きな木があったので、昼食は木陰にラグを敷いてピクニック風に。お昼ご飯のホットドッグを食べ終わったころ、クラオルがみんなの注目を集めた。

『ネラース達も魔物と戦いたいのよね？』

『ご主人様のお役に立つつち！ アタシ達も戦えるつち！』

クラオルの言葉に食い気味にルフスが反応。同調するようにネラース達も頷いている。

『それなら魔力を抑えなきゃダメよ。外に出られて嬉しいのはわかるけど。グレン！ あんたもよ。みんなの魔力のせいで魔物が逃げてちよつと遭遇しないのよ！』

テンションが上がって魔力がダダ漏れだったらしく、その強い気配を察知して魔物がいなくなっていたみたい。魔力が漏れてるなんて気付いてなかったよ。やつぱ少し発散させた方がよさそう。大まかな目的地があるとはいえ、ちよつとくらい寄り道しても大丈夫だろう。

「予定を変更して森に寄ろうか？」

〈本当か!?〉

「ふふっ。うん、本当だよ」

勢いよく反応するグレンに笑ってしまった。

ジルベルト君からは、ネラース達の大きさと冒険者や商人に誤解されて襲われるかもしれないと助言が。クラオルからは、街道沿いだと他の冒険者や商人に遭遇する可能性があるため、少し外

れた場所を通った方が安全だと教わった。なんと……ネラーズ達はパパ達神様に選ばれただけあつて珍しい魔獣らしい。街の中は宿屋以外、影に入ってもらおうと決めた瞬間だった。

昼食後、ネラーズ達には森に向かつてもらう。

みんなの魔力を抑えたからか、途中ホーンラビとエギューラビのウサギの集団に遭遇して、グレンとルフスが嬉々として突っ込んでいった。グレンはニヴェスに乗せてもらっていたのに、突っ込んで行くときは自分の羽で飛んでいて、置いていかれたニヴェスが可哀想だった。

「ホーンラビは額のツノが素材になり、エギューラビは毛皮が素材です。両方とも肉は食べられません」

グレンとルフスが狩ってきた二十四匹ほどのウサギを見てジルベルト君が教えてくれる。ただ、グレンは殴っていたから大丈夫だけど、ルフスが攻撃したエギューラビは毛皮が焼け焦げている箇所があつて、ギルドでは買い取ってもらえなさうだった。このあたりについても説明が必要そう？

その後は特に魔物と遭遇することなく夕刻近くになったので、よさげな場所で野営の準備を開始。結界はブルトンが張ってくれたので安心安全でございます。寝るときは馬車で寝るか聞いてみたものの、みんな久しぶりだから外で寝たいんだつて。

廃教会で回収した廃材をたき火で燃やし、カリダの街でもらった四口コンロを出した。今までまともに使っていなかったけど、やっと活用できそう。

たき火で串焼き、コンロでポトフ、プラスしてサラダとパンが本日の夕食メニューです。

パチパチと燃えるたき火。徐々に夜へと移りゆく空を見て、街を出たんだなあ実感。野営……外で眠るのは呪淵の森を思い出す。討伐隊でも野営をしたけど、あの時は気を張っていたし……途中から具合が悪かったため、風景を楽しむ余裕なかなかったからね。

こんな外でも、リバーシをやりたいと催促がきた。いくらたき火があつても明かりのない外は暗いため、頭上に【ライト】を浮かべてあげる。グレンとエルミスの対戦を、縮小化したネラーズ達が興味津々に見ている。可愛い。

「セナ様、紅茶のおかわりはいかがですか？」

「飲むー！ ありがとう」

ジルベルト君が淹れてくれた美味しい紅茶を飲みつつ、頭の中でマップを開く。ゆっくり走ってもらっているとはいえ、ネラーズ達は魔馬車よりも速い。当初の想定よりも早く森に着けそうだ。ただ今日の感じだとグレンはまだ暴れ足りなさそうだし、ルフスも好戦的っぽい。ネラーズ達も戦いたがっていたから、全員が満足するほどの魔物が森にいてほしいところである。

エルミスから《主よ、そろそろ寝る時間だ》とお知らせが入ったので、リバーシを回収。野営用の毛布を敷いていると、通常サイズに戻ったネラーズが毛布の上に乗ってきた。どうしたのか聞いてみると枕になってくれるとのこと。モフモフに包まれて眠れるなんて素敵！

『ずるいの！』

『ほくも一緒に寝たいですん』

なんとアクランとニヴェスも一緒に寝たいらしい。通常サイズだと大きすぎるし、縮小化すると

潰しちゃうしそう……なんて思っている間に、誰が私と一緒に寝るかで口喧嘩が始まっていた。順番にお願したいと納得してもらって場を収め、今日はネラースが私の枕だ。

「はわぁ……気持ちいい」

ネラースのサラサラな毛並みを堪能してクラオルとグレウスを抱きしめる。ネラースがしつぽでポフポフと優しくリズムを取ってくれているのがまた眠気を誘う。モフモフに包まれ、腕の中にもモフモフ。抗えるワケもなく、私は早々に幸せな眠りの世界へと旅立った。



クラオルに起こしてもらおうとモフモフに包まれていた。そうだ。昨日ネラースに枕になってもらったんだった。

「うふふ。気持ちいい。朝からモフモフなんて贅沢」

寝起きにモフモフを堪能して癒される。ちよつとヤキモチを妬いているクラオルとグレウスもモフモフさせてもらって寝起ききの気分は最高！ 今ならドラゴンにも余裕で勝てる気がする。

〈ウツ……〉

「グレん、どうしたの？ 風邪？」

〈いや……ちよつと寒気がしたただけだから大丈夫だ〉

本人は大丈夫だと言っているけど、心配だから朝食は温まるものにしよう！



生姜とキャベツたっぷりりの鶏団子スープにグレンリクエストの串焼きを作り、スープを煮込んでいる間に日課のストレッチを済ませた。私達に合わせてネラーズ達も一生懸命ストレッチをしている姿がとんでもなく可愛かった。癒し効果がすごい。

ネラーズばかりズルい。今日も騎乗スタイルがいい！とのことで、今日の私はアクランに乗せてもらうことが決定した。向かうは森。騎乗中でも隣を走るグレンやジルベルト君と話せることがわかり、二人とずっと喋っていた。

走りっぱなしだと疲れちゃうだろうからと、お昼前に一度休憩を挟もうと思ってただけど……『大丈夫なの。へっちゃらなの！』ってアクランにアピールされたので、そのままお昼までノンストップで距離を稼ぐことになった。

「あんまり魔物っていないんだねえ」

『そうねえ、主様にとつてはそうかもしれないわね』

プルトリクエストのマドレーヌも添えた昼食後、紅茶を飲みながら誰にともなく呟くと、クオールが拾ってくれた。

街の外に出たら二、三時間に一回は遭遇するもんだと思っていた。カリダの街から王都に移動したときはパパ達が守ってくれていたから例外だろう。

「そうですね……ここまで遭遇しないのも珍しいですが、王都周辺は冒険者がよく通るので狩られてあまり強い魔物はいないと思います。この辺りは開けて（ひら）いているため、魔物がいれば目立つでしょう」

「そっかあ……目立つところにいたら魔物も狩られちゃうから出てこないのか」

「セナ様は戦うことが好きなのですか？」

「え、違う違う！」

ジルベルト君に戦闘狂だと誤解されている気がして即刻否定させてもらう。グレンやネラーズ達のストレス発散のためだと説明すると、彼は無表情ながら瞳をキラキラと輝かせた。なんで？

「えっと……ジルベルト君はストレス発散って今までどうしてたの？」

「僕はセナ様とお会いするまでストレスというものをよくわかっておりませんでした、心を落ち着かせるためにしばしば温室に通っておりました」

「温室かあ。お花に癒されてたんだねえ」

聞いてから傷口を抉（え）つちやつた可能性を心配したものの、大丈夫そうではなかった。言葉には気を付けないとな……と反省していた私は、続けて放たれた「毒が抽出できる花の温室でした」というセリフに顔を引き攣らせた。

聞けば、そもそもジルベルト君がその温室に通っていたのは空気中にも毒素が含まれていて、あまり人が訪れないから。人がいなければ怒鳴られることもない。ジルベルト君は幼いころから毒を飲まされて耐性が付いているそうで、相当強い毒じゃなければ効かないとのこと。ちなみに、プラン団長達はその温室を処分する際、毒素の問題があるため、ジルベルト君が手伝ったらしい。

「ふふっ、心配していただきありがとうございます。あの植物は世に出すべきではないもので、使う人がいなくなったのは喜ばしいことだと思います。温室に通っていたところはツラかったです

すが、全てセナ様に出会うためだと思おうと後悔などありません」

あまーい！　そして洗脳が解けてない！　その微笑みは世の中のお姉様の萌え刺激しちゃうからまた拗らせて土下座されたり、拜まれたり……なんてことはされたくないのでスルーすることに決めた。代わりにジルベルト君の頭を撫でてあげると、くすぐったそうに照れていた。

おなか落ちていたら出発。

しばらく走っていると、魔物の気配を察知。それと同時に、ルフスが私の近くまで下りてきた。

『ご主人様、ご主人様！　あつちにスケイルヤーシリがいたつち！』

スケイルヤーシリ……たしか凶鑑ではウロコのあるトカゲだった気がする。ウロコがあるならそれが素材になりそうだ。

ルフスには見守りをお願いして、グレンに「素材が傷まないように倒してきて」と頼んだら嬉々として飛んでいった。昨日のニヴェスと同様に、今日はネラスが置いていかれていた。

追いかけた私達が着くころには戦闘はもちろん終わっていて、あのセーラー服の芸人さんが追いかけてこをしたコモドラゴンくらいの大きさのトカゲが四匹転がっていた。

ジルベルト君によると、ウロコとおなかの中にある火袋と呼ばれる内臓の一部が素材らしい。火袋はその名の通り火の袋で、言わば火種を収納しておく場所。火種の一部を取り出し、息で空気を送り込み火を吐くんだそうだ。火属性が付いていて武器や防具の素材に使われている。ウロコも同じく火耐性が付くため、全体的にいいお値段で買い取ってもらえるとのこと。

ジルベルト君の素材知識はとつてもありがたい。私の中ではジルベルト凶鑑として定着しそう。

トカゲを回収し、ルフスには野営にいい場所を探してもらおう。ルフスの案内で進むと、そこには全長五メートルはありそうな巨石があった。その岩が欠けたのか、周りには小さめの岩が転がっている。ルフスいわく、『風よけになるつち！』だそうです。気を利かせてくれたのね。

転がっている岩や石をほどほどに除けている間に辺りは真つ暗に。夜ご飯はグレンリクエストの牛丼だ。野菜も食べてくれとグレンの分だけ玉ねぎを多めにしたら、おかわりのときに「肉いっぱいがいい」って言われた。

夕食後、ルフスから『攻撃しない方がいいつち？』と質問が飛んできた。トカゲのときにグレンに頼んだことが引つつかかっていたみたい。素材が傷むと買い取り価格は安くなり、肉が傷むと料理に使えないと説明したら納得してもらえて一安心。今後は攻撃方法を変えてくれるとのこと。

みんながリバーシに夢中になっている間、私はアクランを枕に夜でもできる遊びを考えていた。



ふと目を開けると自分の周り何やらキラキラしていた。寝起きのボーっとした頭のまま辺りを見回す。キラキラしていたのはアクランの毛並みに朝日が反射していたから。そっか、私寝落ちしたのか。リバーシをしていたみんなもオールはしなかったらしい。

『んん……主様おはよう』

『むにゃ……おはようございませしゅ』

「クラオル、グレウス、おはよ。朝ご飯作るから、みんなを起こしてもらってもいい？」
腕の中で寝ぼけている二人をモフモフしてから朝食作り。本日のメニューはホットサンド、サラダとスクランブルエッグ、コンソメスープ。グレンの分だけは焼いたベーコンも追加した。

日課のストレッチも済ませ、私はニヴェスにまたがった。

巨石を離れると三十分もしないうちに草の背が高くなり始めた。人の往来がないせいだろう。今では大人の膝上ほどもあり、私じゃ歩きにくくてしょうがない。馬車も車輪に草が絡みそう。ニヴェスの上に乗せてもらっていて助かった。草を刈りながら進むか聞いたものの、ニヴェス達は特に気にならないとのことで、そのまま進むことになった。

森の入口に到着したのはお昼前。森に入るのはゆっくりお昼休憩を取ってからにしよう。みんなご飯を食べている間もずっとソワソワして落ち着かないので、昼食後にまたストレッチをしてもらった。はしゃいでケガはしてほしくない。

「さて、お待ちかねの森の散策だよ。自由にしていけど、迷子とケガに気を付けてね。夕飯までには私のところに戻ってくるよ。私は適当に採取してるから。いつてらっしゃい」

ネラース達は嬉しそうに『いつてきまーす！』と散らばっていった。クラオルとグレウスも私の類にスリスリしてから出発。グレンはジルベルト君に「我らも行くぞ！」と声をかけて連れていった。森にはそこそこ魔物の気配もあるからグレン達のストレス発散も大丈夫でしょう。

《主よ》

「あれ？ エルミスも自由にしていんだよ？」

《ふむ。儂は主と共にいたいのだ。不満か？》

「まさか。ふふつ。心配してくれてありがとう」

それを聞いたエルミスはクラオルの定位置である右肩に腰を下ろした。

《主よ、皆のために森に来たのだろう？ 捜し人はよいのか？》

「王都ではみんなに我慢させちゃったからね。私のことを優先してくれるのに甘えてたけど、みんなのこともちゃんと考えないとなつて反省しつ——うぎゃつ！」

肩から下りて大人サイズになったエルミスに、いきなり抱きかかえられて変な声が出てしまった。どうしたのか聞いてみると《草で歩きにくそうだったから》だそう。いきなりはビックリするから止めていただきたい。私が頬を膨らませるとクツクツと楽しそうに謝られた。

運んでもらいつつ薬草採取。ふと、弱そうな魔物の気配が集まっていることに気が付いた。気配の近くまで進んでもらったものの、魔物が見当たらない。

「ん？ いない？」

《上だな》

エルミスが私を抱えたままフワリと浮かんでくれた先にいたのは、私が大の苦手とする生き物だった。しかもシュルシュルと鳴き声みたいな音まで出している。

「うひいっ……!? 無理無理!! マジ無理っ！」

一瞬にしてゾワワアッと鳥肌が立ち、エルミスに訴えてその場を離れてもらう。

「うう……気持ち悪い……アレは無理だよお……」

《アレは攻撃手段を持たぬ故、害はないぞ？　アレがいること自体が珍しいが》

「そういう問題じゃない。あのウニヨウニヨっていうか、ウゴウゴっていうか……とりあえずフォルムが無理！　しかもあの大きさにあの数とか恐怖でしかない」

この森でアレと同じくらい弱い魔物の気配はしないけど、アレがいると思うと気は休まらない。いつの間にか近くについて、上から落ちてきたりなんかしたら錯乱してしまう気がする。

《……ふむ。では儂が事情を聞いてこよう。主は――》

「ダメ！　アレが近くににいるのに一人はやダ！　エルミス……お願い」

《ふむ。ならばもう少し離れよう》

被せて拒否し、しがみつく私をバカにすることもなく、エルミスは宥めるように背中をポンポンしてくれている。一人のときにアレに遭遇したら、加減を考える余裕なんてないまま魔法ぶっぱなしちゃうよ、きつと。

みんなと分かれた森の入口近くまで戻ってきたとき、クラオルとグレウス、グレンに抱えられたジルベルト君が走ってきた。その後ろにはプルトンやネラース達まで。

『主様あああ！　大丈夫なの!?』

へセナ！　どうした!?』

「セナ様！　どこかケガでも!?」

私と契約をしているから、私の動揺がなんとなく伝わるんだって。ジルベルト君はグレンと一緒に

だったからね。

「あっちにね、虫がいたの……でつつつかい幼虫!!　うわあ……思い出しちゃった。うう……気持ち悪い」

自分を抱きしめるように体をさすっていると、クラオルとグレウスが肩に登って頬にスリスリしてくれた。

一メートルはありそうなあの緑色と白色の幼虫が十匹以上集まり、樹上でウネウネと動いている姿はもう思い出したくない。エルミスが詳しく説明してくれている間も、私はクラオルとグレウスをモフモフして忘れようと努めていた。

《私が聞いてきてあげるわ！　セナちゃんはエルミスと一緒にいてね》

パチンと私にウインクをキメたプルトンは、ア、しらがいた方向に向かっていった。グレンとジルベルト君は戦っていた獲物の回収に戻り、ネラース達は近くに何もいなかチェックに回ってくれたお騒がせしてごめん。そしてありがとう。でもあの大群は本当に無理なんだ。

ちょうどここは少し開けているので草を刈って野営の場所にしちゃおう。何かあったときにすぐに森から出られるからね。

風魔法で草を刈り、刈った草に【クリーン】をかけて草の絨毯に。たき火を作ってコンロを出したところでプルトンが戻ってきた。プルトンによると、アレらはカイコとパピヨンバタフライの幼虫で、お互い狩られて数が減り、生きるために協力し合っていてあそこで生活していたらしい。

「パピヨンバタフライはわかんないけど、カイコの方は精霊の国で保護したミスリルカイコの

仲間だよね？」

《そうなのよ。それで逆に安全な場所を知らないか聞かれちゃったわ》

「精霊の国で保護してあげるの？」

《私だけじゃ決められないから、セナちゃんにウエヌスを呼んでもらおうと思って戻ってきたの》

「なるほど。ちよつと待つてね」

ウエヌスの指輪を握り、念話で呼びかけるとすぐにウエヌスは姿を現した。

《セナ様、お呼びでしょうか》

「うん。詳しくはプルトンに聞いてもらえる？」

《かしこまりました》

説明をプルトンに丸投げして、私は夜ご飯の準備。ウエヌスも一緒に食べるでしょう。ネラース達も基本どんぶり一杯しか食べないとはいえ、私からしたら大所帯だ。定食屋さんの女将さん気分でご飯を作っていく。

もうすぐできるぞ、というところでウエヌスから声がかけられた。どうしたのかと思えば、アしらに話を聞きに行ったそうで、指輪を使って精霊の国に連れていくから、一緒に来てほしいとのこと。サアつと血の気が引いた私を庇うようにエルミスが私の前に出てきた。

《ウエヌスよ。主はワーム系の魔物が苦手だ》

《そうだったのですね。申し訳ございません。セナ様に渡しております指輪をお借りしてもよろしいでしょうか？》

私から指輪を受け取ったウエヌスは《すぐに戻ります》とピュンと飛んでいった。それを見送ったエルミスは安心させるように私の頭を撫でる。

《ウエヌスも無理は言わぬ。精霊の国でも主とは会わなくて済むようにしておこう》

「うん。あの子達に罪はないのはわかっているけど、やっぱり苦手だからそうしてもらえると助かる」

戻ってきたグレンやネラース達からは倒した魔物を受け取り、ウエヌスとプルトンが戻ってきたらみんなで一緒に夜ご飯だ。

ウエヌスは自分が自分の分も準備しているとは思っていなかったらしく、大喜び。まだ仕事が残っているそうで、夕食を食べた後、彼は名残惜しそうに精霊の国に戻っていった。

幼虫達はどうもないと聞いていても不安でしょうがないのでガツチリと結界を張って、今日はニヴェスに枕になってもらった。気持ちのいいモフモフに包まれ、癒されながら眠りについた。

第二話 ソイヤ村

移動しながら森には三日ほど滞在。その間、グレンはジルベルト君を連れ回して主に狩りをして食肉を確保してきて、ネラース達は素材を傷ませないように手加減して攻撃する練習に精を出していた。クラオル達は私のために木の実集め。各々、概ね満喫できたみたい。

グレンのストレスが発散されたのを見計らい、当初の目的地であった村にまた数日かけて向かう。騎乗していると目立つため、村が目視できるくらいの場所で馬車に乗り換えた。その馬車を引くのは本人の希望によりニヴェスに決定。一人で重くないのか聞いたところ、軽量化されているから余裕なんだって。

ニヴェスが速度の調節なんかも全部やってくれるから御者は格好だけ。私がやってもよかつたんだけど……ジルベルト君がソワソワしていたのでお願いした。人と話すことを考えると、グレンや私がやるよりもジルベルト君に頼んで正解だったかもしれない。私はイマイチこの世界の常識を把握しきれていないし、グレンはケンカを売っていると誤解されかねないもんね。

すぐに出られるようにワンルームマンションの空間には入らず、普通に馬車の窓から様子を窺う。周りには畑が広がっており、今は村の入口でジルベルト君が第一村人と何かを話している。

御者席の後ろに付いているドアからジルベルト君が中に入ってきて説明してくれたのは、村がアーマールウルフという魔物に襲われて、働き手である男性が死傷。村は貧しく、冒険者ギルドに依頼を出すこともできず……動ける村人でなんとか一匹を仕留め、他は追い払ったが私達を泊める余裕はないとのこと。

「なるほど。ある意味テンプレだね」

「テンプレ、でございますか？」

「えっと……なんでもない。私が出て話してもいいかな？」

「大丈夫だと思います」

いかん、いかん。前の世界の話は気を付けねば。

気を取り直し、御者席のドアから顔を出す。

「こんにちは」

「また一段とちっこい子供だな。その坊主に話した通りだ。村人のメシすら危ういのに旅人を泊める余裕なんかない。他を当たってくれ」

挨拶に反応してくれたのは、村の門を警備しているという三十代と思われる男の人だった。革の鎧を着ていて、疲れを滲ませている。

「うーん……お兄さん。ケガした人はどれくらいいるの？」

「あん？ 軽いケガから動けないやつまで合わせたら二十人以上だ。わかったなら……」

「なるほど。よしっ、お兄さん。取引しよ？」

「あ？ ガキが何言ってるやがる」

「これ、私の商業ギルド兼、冒険者ギルドのカードだよ」

目つきを鋭くさせたお兄さんにギルドカードを見せる。渡されたお兄さんは目を丸くして驚き、ギルドカードと私を交互に見ている。

「こんな子供が商業ギルドと冒険者ギルドに……？ 何が目的だ？」

「私達が泊まる場所。馬車が置ける場所だけでもいいし、ご飯もいらさない。その代わりに、私がケガ人全員分のポーション渡すよ」

門番さんが怪訝そうに見てきたので、「お兄さんにはサービスです」と一番効果の弱いポーション

ンを渡してあげる。門番さんは少し悩んだ後、意を決したようにポーシオンを一気飲み。疲れが緩和されたのか、「確認を取ってくるから待ってろ」と言い残して村の中に入っていった。

「わざわざ村の中に泊まらなくてもいいんじゃないか？」

「ふふふ。甘いよ、グレン！ この村の特産品を安く売ってもらえるかもしれないじゃん」

「特産品とは村の周りの畑にあった農作物ですか？」

「ジルベルト君大正解！ あれ枝豆だと思っただよね。ちゃんと見ないとわからないけど……」話している間に、門番のお兄さんが戻ってきた。

「村長から話があるそうだ。本当に滞在したいなら来い」

「はい！」

門番のお兄さんの案内でここソイヤ村の村長の家に向かう。村の道は広く、馬車は楽々通れているものの、全体的に殺風景だ。必要なもの以外ない感じ。家は木造の平屋タイプで修復した跡がこちらにあり、出歩いている村人はいない。各家に人がいる気配はするから疲れた体を休めているか、ケガ人のお世話をしているんだろう。村が貧しいというのは本当っぽい。なんというか……村全体の雰囲気は暗く、重苦しい。半数くらいがケガをしているせいかもしれないけれど。

村長の家は村の中では一番大きく、唯一の二階建てだった。何もないとはいいつつも、一応二ヴェスに馬車をお願いしてから村長の家に入る。迎えてくれたのはバーコード頭のおじさんだった。簡単に自己紹介をすると、私が商人兼冒険者であることに驚かれた。どっかの金持ちの気まぐれだと思っていたらしい。グレンがいるとはいえ、相手は五歳の子供なのに丁寧に謝罪された。

「アーマールフはなんとか追い払えましたが、いつまた襲われるかわかりません。村人は疲弊しており、次襲われたらどうなるのかわからないのです。ポーシオンを渡してまでこの村に滞在するなんて、とても商人様に利があるように思えません」

「うんとね、私は村の周りで作られている農作物が欲しいんだ。だから売ってくれれば嬉しいな？ すごく美味しそうだったから」

「へ？」

綺麗事を並べるのは得意じゃないので、欲望をそのまま口に出すと村長さんと門番さんはポカーンと口を開けて固まってしまった。固まる要素なんかなかったと思うんだけど……「村長さん」と呼びつつ手を振っていると、ようやく意識が戻ってきたもよう。

村長によると、この村ではあの農作物は成長サイクルが早く、一ヶ月ほどで収穫可能。ただ、一般的には食べられていない作物なんだそう。村人はほぼ自給自足の生活で、通貨を得るために男性は狩りを、女性は小物を作って売っている。魔物の素材や小物を売ったお金で生活に必要なものを買い、あの農作物は小麦が買えなかったときの非常食として村で備蓄されているとのことだった。

「ええ……もつたない。私が求めているものだったら買いたくraisだけど、保存状態がわからないから見てからかなあ？ とりあえず、私達を泊めてくれるってことでいい？」

「わかりました。部屋を準備しますのでお待ちいただいてもよろしいでしょうか？」

「ありがとう。ならその間に村人にポーシオン飲ませてくるよ。先に回復した方が安心できるでしょ？ もし買いたくないものじゃなかったとしても、泊めさせてくれるお礼ってことでポーシオン代

を請求なんてしないから安心して」

村長との話を見守っていた門番さんに案内をお願いして、ケガ人がいる家に向かう。その途中で門番さんに話しかけられた。

「今までも何回か商人が来たことがあるが、買い取っていったのは魔物の素材だけだ。他のものは何一つ見向きもせず、さっさと帰った。他の行商人も同じようなもんだ。一度来たら二度は来な」

「そうなんだ」

「アンタの本当の目的はなんだ？」

「本当の目的？ さっきも言った通り、あの農作物だって。私の予想通りで保存状態がよかつたら全部買い占めるから安心して！」

「え……いや、そういう意味じゃ……（量の話じゃねえよ。売れねエモンを買い取って村に恩を売ろうとしてるワケじゃねエのか……？）」

握りこぶしを作って鼻息荒く宣言し、頭の中が枝豆でいっぱいになった私には、門番さんの吹きは届かず。枝豆をさらに成長させて乾燥させたら大豆だけど、どれくらいで収穫しているのかはわからないんだよ。備蓄してると言っていたからには大豆だったらいなく。レパートリーが増やせる！ ……なんて、ケガ人の家に着くまで枝豆と大豆料理のことしか考えていなかった。

そんな私はクラオルからのテシテシ攻撃で意識がトリップ先から戻ってきた。いつの間にかケガ人の家に着いていたみたい。クラオルからは呆れた視線、グレンからは期待の眼差し、ジルベルト

君からは温かい目で見られ、なんとも居心地が悪い。

「えっと……」

『んもう、本当に主様つたら食材に目がないんだから』

『ごめん、ごめん。みんなと美味しいご飯食べたくてさ。もう大丈夫だよ』

プリプリしている可愛いクラオルを宥めながら家に入った瞬間、漂う濃い血の臭いで軽い雰囲気は霧散した。

門番さんの説明では、この家の男性は一人暮らしで何かあっても自分は構わないと魔物に果敢に挑んでケガをしたらしい。該当の人物が寝ているベッドに近付くと、ただのケガではないことが一目瞭然だった。二十代だと思われる男性の顔色は紫がかっており、呼吸は荒く、険しい顔をして眠っていたのだ。

「この人……毒に侵されてるね」

「なんだと？ じゃあポーション飲んで……」

「ゴホッゴホッ……ヴォフッ！」

男性が咳き込みながら吐血して目を覚ました。私達がいることに目を見開いたのは一瞬で、門番さんが一緒にいることで大丈夫だと思つたみたい。

「こんにちは、初めまして。普通のポーションとちよつと特殊な解毒ポーション、どっちがいい？ ちなみにお金はいらないよ」

「はあ。」

門番さんとケガ人のお兄さんの声が揃った。

特殊な解毒ポーションとは、実験でいろいろ作ったときにできた体力も回復する解毒剤。鑑定では毒全般大丈夫っぽいから大丈夫だと思うんだけど……いかんせん使ったことがないのでどれくらいの効果があるのかわからないんだよね。

「ゴホッ……解毒……ポーションを頼む……」

「はい。コレだよ」

私が渡した解毒ポーションを男性は震える手で一気に飲み。すると徐々に顔色はよくなり、呼吸も落ち着き始めた。

「すげえ……もうなんともねえ……こんなポーション持つてるなんて、お嬢ちゃん何者だ？」

「何者って言われても……通りがかりの子供の商人、かな？　なくなった血は戻ってないから、しばらく安静にすることをオススメするよ」

本当に大丈夫かをこっそり鑑定して、自分の手をグーパーして変化を確認しているお兄さんに告げる。【状態】が貧血になっていたので、そこまではポーションで治らなかつたみたい。

グレンと門番さんをお願いして窓を開けてもらい、魔法で空気の入れ替えをしてから次のケガ人の家に向かう。

「あのポーションはなんだ？　普通の解毒ポーションと違うんだろ？」

「ちよつと特殊って言つたでしょ？」

「まあ、そうだが……（その特殊つてのが気になるんだろうが……！）」

何か言いたげな門番さんをスルーして、ケガ人がいる次の家のドアをノック。出てきたのは奥さん。旦那さんとお子さんがケガをしているとのこと。彼らは普通のケガだったため、ノーマルポーションを飲ませるだけで治療は完了した。

結局軽いケガをしていた人も合わせて二十六人ほど。全員にポーションを飲ませ終わったころには、日が暮れて辺りは闇に支配されていた。

ニヴェスには影に入ってもらい、馬車に結界を張ってから村長の家に戻る。村長は本当に全員にポーションを飲ませてもらえるとは思っていなかったらしく、涙ながらにお礼を伝えられた。農作物の確認は明日させてくれるとのこと、本日は用意してくれた部屋にお邪魔することになった。夕食を済ませ、気になって疑念をみんなに投げかける。

「ねえ、ずっと引つかかっていたんだけどさ、アーマーウルフって毒の攻撃してくるの？　確か凶鑑では毛皮が硬くて物理攻撃が効きにくいとは書いてたけど、毒なんて一言も書いてなかったよ？」

「僕もセナ様がおっしゃった通り、毒を扱う種族ではないと認識しておりました」

「ジルベルト君も知らないのか……」

「へむ。もしかしたら亜種や変種かもしれんな」

亜種か……

この世界で亜種とは、通常とは異なる成長や進化を遂げたモノを示す。ゴブリンが通常ならばブゴブリンに進化するところ、ゴブリンソルジャーやゴブリンマジに進化した感じだ。基本的に

亜種の方が通常進化したものより強い場合が多い。ゲームをやっていた人なら感覚的にわかりやすいかも。

変種は亜種のように公に認知されていないモノを示す。亜種よりもレア度が高い。

「うーん……なーんか引つかかるんだよね」

今日ポーシオンを飲ませたケガ人のうち、最初のお兄さんを含めて八人が毒に侵されていた。全員あの実験的に作ったポーシオンで毒は消えたものの、ただの毒ではなさそうだった。倒したというアーマーウルフの毛皮でも残っていたら見せてもらおうかと思っただけ……ケガ人が多すぎず剥ぐこともできず埋めたんだそう。その村人の行動も引つかかっている一因だ。

「よしっ！」

『調べるのね？』

「さすがクラオル」

ジルベルト君には村長が部屋に来たとき怪しまれないようお留守番をお願いして、プルトンには情報収集を頼んだ。私はグレンと一緒にバレないようにトイレから村の外まで転移して、村人が追い払ったというアーマーウルフを探す。スキルのマップを開いて【サーチ】をかけるとすぐに発見。村からはそこまで離れていない場所に三匹が固まっているらしい。

アーマーウルフのもとに向かうと、どうも様子がおかしかった。鼻が曲がりそうなほどの悪臭を放ち、毒の息を吐いている。皮膚は爛れ、肉や内臓が見えているモノまでいた。

「腐ってる……？ ゾンビ？」

へいや……こやつらは理性があるからゾンビではない」

会話がでるらしく、グレンが通訳を買って出してくれた。

グレンが聞いたところによると……村の近くで村人を襲ったのは本当だけど、村そのものは襲っていない。翌日村人に奇襲され、戦っているうちにこうなってしまった。自分の体が腐っていくのがわかる。そのうち理性も消えてしまっただろう……とのことだった。

「このままはツライから殺してほしいそうだ」

「そんな……」

「セナ。全てを助けることはできん。確かにセナなら助けられるかもしれないが、自然の摂理を壊しかねん。セナが嫌なら我がやるぞ」

「わかった……やるよ」

「せめてこれ以上ツラくないように……と浄化を込めた光魔法でアーマーウルフを覆い、一瞬で終えらるよう光線で心臓を一突きする。」

「セナ……そんな顔をするな。礼を言っていたぞ」

「ホント？」

「ああ。『ありがとう。幼き人の子よ。そなたに幸あらんことを』だそうだ」

「そっか……」

生死をかけた戦いなら手段を選んでいられないこともわかる。相手が魔物なのもわかるし、魔物の味方をするわけじゃない。私だってオークとかゴブリンとかを窒息死させていた。それなのに、

なんでこんなにもモヤモヤするんだろう。自分でもよくわかんないや……

アーマーウルフ達を回収し、転移で村長家に戻るとプルトンがいた。プルトンはこの短時間でしっかり調べてくれていて、それについては明日村長に話を聞くことに。テンションが低いままの私を心配したクラオルとグレウスに慰められながら私は眠りについた。



朝食を済ませて部屋から出た際、何やら外が騒がしいことに気が付いた。不思議に思いつつも一階に向かうと、階段下に村長と門番さんが待ち構えていた。

「おはようございます。昨日は村人を助けていただきありがとうございます。本日倉庫に案内するつもりだったのですが、ケガが治った村人がお礼を言いたいと集まっておりまして……皆様の安全と案内のためにこやつを呼びました」

「ってことは、この騒ぎの原因って私？」

「あんなポーシオンを無償で飲ませたんだ。こうもなるだろ……」

呆れ顔で門番さんに返された。あんなポーシオンって言われても、ただのポーシオンだ。解毒の方は使ったことがなかったものであり、効果の保証なんてないし、実験的に使わせてもらったようなものである。……この説明はするべきじゃないな、話題を変えちゃおう。

「ねえ、門番さんもアーマーウルフと戦ったんだよね？ 戦っている最中に不思議なこと起こらな

かった？」

門番さんは少し考えた後、村人の一人が何かを投げて戦闘状況が一変したと教えてくれた。

「やっぱり……その村人って？」

「ちよつと変わったやつだな。人見知りで、あまり他人と関わりたがらないやつだ」

詳しく聞くと、普段は農業をしていて戦うタイプではなく、今回の戦闘に参加したことにも驚きだったらしい。

「なるほど……」

「あいつがどうかしたのか？」

「うん、ちよつと……ねえ、村長。解毒しようとして、治らなかつたんでしょ？」

私の言葉にわかりやすく動揺した村長を見て、門番さんが険しい表情に変わった。

「どういふことだ？ 村長は村人達が毒に侵されていることを知ってたのか？」

今にも村長に突つかかっていきそうな門番さんを宥めて、村長に説明を求める。

顔を悪くさせた村長によると……以前訪れた商人から魔物に効くという毒薬を口車に乗せられて件の村人と共に購入。商人が去った後、村長は毒薬が畑や人にどのように影響するのかわからないことに気付き、使わないことに決めた。しかし、今回のアーマーウルフとの戦闘で村人が使ったことを終わった後で知ったんだって。ケガをした村人の様子を見て毒薬の影響ではないかと疑い、数少ない解毒ポーシオンを飲ませ、無毒草も可能な限り使った。でも一向に回復に向かう様子がないので途方に暮れていた……とのことだった。

その村人が密かに毒薬の研究でもしているのかと思っただけ、違ったのか。

「その毒薬、見せてもらえる？」

「はい……少々お待ちください」

村長が持ってきたのは赤黒い液体が入った小瓶だった。鑑定してみると名前は【腐蝕毒】。体を腐敗させ理性をなくしていく毒薬で、普通の解毒ポーションでは解毒できないらしい。取扱要注意なんて書かれているのは初めて見た。製作者の名前はコンジヨタ・グラヴ。

誰だよ。知らないけど、この名前は覚えておこう。村人の様子から空気感染や飛沫感染はしないっぽいものの、こんな危ない毒を使用方法も教えずに売るなんて頭おかしい。

「これは腐蝕毒。体を腐らせてゾンビ化させる毒薬だっつて」

「――」

「おそらくアーマールフを介して毒に侵されたから、すぐに体が腐らなかつたんだろうね。倒したアーマールフが腐つてたから埋めたんでしょ？」

「はい……セナ様のおっしゃる通りです……」

「私が解毒しなかつたら、毒に侵された村人はゾンビ化してたかもね」

脅すつもりじゃないけど、おそらくそうなただろろう未来に言及すると、村長と門番さんは顔を真っ青にさせて震えた。

「その村人はどうしてるの？」

「……やつも毒薬のせいだと思ったらしく、無毒草を集めに森へ向かいました」

「無毒草じゃ解毒できなかったのに？」

「量が足りないのかもしれないと……責任を感じておるのでしょう」

なるほど、悪い人物じゃなさそうだ。でも昨日私が解毒させたからも無毒草集めはしなくていいはず。その人物がどこにいるのか確認すると、昨日は戻ってきていないみたい。

この村から一番近いのは私達が寄った森とは反対方向の、歩いて一日ほどの距離にある小さな森。

「おそらく無毒草を集めるまで戻ってこないと思います」

「戦術がないなら危なくない？」

「いてもたってもいられなかつたのでしよう。追い詰められた様子でしたので」

放っておいてもいいんだけど、後味が悪くなるのはいただけくない。ジーっと見上げると、ため息をついたグレンに頭をクシャクシャされた。

「ハァ……仕方がない。我が探してやる。近くの森にいる人間を連れてくればいいんだろ？」

「グレンありがとうー！」

抱きついてお礼を言うと、〈とつとと捕まえてくる〉と窓から飛んていった。

村長と門番さんは、グレンが羽を出した姿にこれでもか！ っくらい目を見開いて驚いていた。鳥族も見ることないのかな？ まあいいか。本来の目的を先にさせてもらおう。

「グレンが迎えに行っている間に倉庫を見せてもらってもいい？」

「はっ、はい！ ご案内いたします」

村長宅を出た瞬間、わらわらと寄ってきた村人に囲まれてしまった。村長、門番さん、ジルベル

ト君が盾になってくれたおかげでもみくちゃんにならず済んだ。ボディガードに守られているお偉いさんみたいだ。一斉に話しかけられ、理解できたのは「ありがとうございます」って言葉だけ。「よう！ 昨日は助かったぜ！」

戸惑っている中、村人をかき分けてきたのは最初にポーションを飲ませたお兄さんだった。

「みんなお嬢ちゃんに感謝してんだよ。村にあった薬草じゃ回復が追いつかなかった。気まぐれでも助けてくれてありがとうよ」

「わざわざお礼に？」

「こんだけ騒いでたら村にいれば嫌でも聞こえるからな。ちよつと待ってる」

私にそう言うなり、お兄さんは群がる村人に「感謝してんのはわかるが、邪魔になってんだろ。ほらほら、離れるー」と声をかけていく。

「あの！ 握手してください！」

「へ？」

お礼を口にしては離れていく村人にホツとしたのは束の間、大人が離れたことで走り寄ってきた少年のセリフに呆気にとられてしまった。少年は顔を真っ赤にさせ、右手を差し出している。

握手って……ポーションを飲ませただけでこんな偉人扱いになるの？ 首を傾げながらも握手してあげるとコチラが戸惑うくらい大喜びされた。それを見ていたのか、僕も私もと、ちびっ子を中に列ができた。私はアイドルですかね？ これは握手会ってやつでは？

握手会を終えるころには隠しきれない疲れに襲われていた。大人も合わせて二十人も並んでな

かったのに。こんなとは比にならないくらいの大規模な握手会を、笑顔ですつとこなす本物のアイドルはすごいと心から尊敬します。そして私にはアイドルは無理です！

「セナ様、大丈夫ですか？ 断つてもよかったですのでは？」

「他の人とは握手したのに自分はダメなのかってなるでしょ？ それが原因でモメるとかやめてほしいじゃん？」

私の発言に器用に瞳だけをキラキラさせて、「セナ様はやはり優しい！」なんて、ジルベルト君が感動している。ジルベルト君……違う、そうじゃない。このことが原因でイジメとかに発展したら後味悪いから……っていう自分の都合であります。ただの自分可愛さだったのに否定しても謙遜と捉えられてしまった。洗脳は根深い。

気を取り直して倉庫に向かうと、倉庫には大量の大豆が。

「わあ、やつぱ大豆だ!! 最高〜！」

テンションが爆上がりした私はすぐに鑑定を使って選別していく。村長も門番さんもお兄さんも引いていようと気にしない。食材の方が大事！

あらかた鑑定して選別したあと、気になっていたことを問いかける。

「ねえ、大豆も嬉しいんだけど、枝豆はないの？」

「……えつ、エダマメですか？ こちらはソイ豆と言いますが……」

「そっか……枝豆の状態では収穫してないのか……」

「ソイ豆じゃダメなのか？」

肩を落とした私にお兄さんが聞いてきた。

「ううん。ダメではないよ。ただ、今畑になつてる状態のやつもほしかつたの」

「そういうえば美味そうって言つてたナ……」

「あれをか!? あの状態のは食べねえだろうが! 死ぬぞ!」

私の発言を覚えていたらしい門番さんが眩くと、お兄さんが大げさに反応した。

「現物見ないとなんとも言えないけど、美味しいよ?」

「……」

信じられないものを見る目を向けられて困惑。どう考えても枝豆は美味しいので。

「あ! グレンが戻ってくるから一回村長の家に戻ろう」

村長の家に戻ると、出ていった窓からグレンが青年を担いで戻ってきた。

〈こやつはリトルヤーシリ相手に腰を抜かしてたぞ〉

リトルヤーシリはスケイルヤーシリとは違い、ただの小さいトカゲだ。小さいとは言つても、平均三十センチくらいはあるって本には書いてあつたけれども。

「腰を抜かすつて、よく森まで行けたね……」

〈面倒だから気絶させて持つてきた〉

「んん……ん?」

話し声のせいとか、青年が目を覚ました。状況がイマイチ理解できていないらしく、キョロキョロと周りを確認して、お兄さんを見つけると目を丸くした。

「ケ、ケガは!? 起きてても大丈夫なんですか!」

「おう! このお嬢ちゃんがポーションくれて治つたぜ!」

「……………よつ、よがつだアアア!」

青年はお兄さんの体をベチベチ触つてケガが治つていることを確認すると、泣き始めてしまった。大号泣と言つても過言ではないくらいに、お兄さんの腰あたりに縋りついて。

「おいおい。赤ん坊じゃねえんだから落ち着け」

苦笑を浮かべたお兄さんが青年の肩をポンポンと叩く。

青年いわく、自分は人見知りではあるけど、適度な距離を保ってくれる村人達が好き。なのに、自分のせいで毒に侵されてしまい、どうにか解毒できないかと無毒草むどくそうを探しに行つたらしい。

「ごめんなさい。僕のせいでごめんなさい……」

「村のためになんとかしようとしたんだろ? 実際その毒薬でアーマーウルフを追っ払えたようなもんだし、オレは別に気にしないが……」

ひたすら謝り続ける青年にお兄さんは困り切つていて、村長達は考えあぐねている様子である。

「ねえ、村人全員集めて毒のこと話したら?」

「「え」」

「他にもあの毒薬を買つてる人がいるかもしれないし、この先また似たような毒薬を買わないようにって抑止力にもなると思うよ」

「僕もそれがいいと思います……みんなに黙っているのは騙しているみたいだし……ちゃんと謝ら

ないと……」

青年が私の案に乗り、急遽村長宅前に村人を集めることが決定。お兄さんと門番さんが村人を呼びに行き、私達は村長宅前で村人が集まるのを待つことになった。

全員が集まったところで村長が説明して、青年が謝罪。毒に侵されていた人達は予想していたのか疑問が解けた感じだったものの、若い女性数人が怒りを滲ませた。

「戦っていない人が怒るのはちよつと違うと思うんだよね。この人は村を助けたい一心で商人から毒薬を買った。確かにそのせいで毒に侵されたけど、魔物を追い払えたのも事実でしょ？ 村のために金貨五枚だよ？ 村のためにつて五万ゼニ払える人はこの中に何人いるかな？ リトルヤーシリを怖がるくらいなのに、無毒草を集めに一人で森に行つた。あなた達はその間何してた？」

この村の生活レベルを考えたら金貨五枚つてかなりの金額なんだよ。昨日プルトンから報告を受けた際、話題に出てきた女性を真つ直ぐ見つめて問いかける。プルトンから聞いたのは、この村の男性に対する愚痴。弱い、ダサイ、使えないとイライラしながら物に当たつていたらしい。

「それに……村を守るために立ち向かつてケガをした人も、誰かのために一生懸命になれる人もカツコイイと思う。お姉さんは違うの？」

「そうね……私は怒れる立場じゃないわ」

私が問いかけた女性を筆頭に、怒つていた女性達は怒りを収めてくれた。怒りの矛先有耶無耶作戦は成功したつばい。素直で助かった。言い返してくる口達者な女性だったら勝てる気がしないからね。

「私は今回の件を教訓に商人や冒険者から怪しい薬を買わないことにした方がいいと思う」

「そんなに危ない毒薬だったのかい？」

「そつか……見てない人もいるのか。じゃあ見せた方が早いね。ちよつと下がつてもらえる？」

村人がズレて空いたスペースに昨日のアーマーウルフを出す。見世物みたいにしちやつて申し訳ないけど、村人と魔物……この先お互い同じ目に遭わないために許してもらいたい。

「[[[[ヒイツ……]]]]」

「これが腐蝕毒に侵されたアーマーウルフ。売り文句は『どんなに強い魔物にも勝てる毒薬』だったらしいけど……腐蝕毒は体を腐らせてゾンビ化させる毒薬なんだよ」

私の説明を聞いているのかいないのか、みんなアーマーウルフに目が釘付けだ。怯えや嫌悪の表情だから、目を逸らしたいけど逸らせない状態つばい。

「う、埋めたはずなのにどうして……」

「アーマーウルフは毛皮が素材なのに剥がないで埋めたつて聞いて、不思議に思つてさ。昨日の夜追い払つたつていうアーマーウルフを探したの。三匹いるよ。見る？」

「いっ、いえ！ 退治していただきありがとうございます！ もうしまつていただけると……」

アーマーウルフをしまうと、ホツと息を吐かれた。

「皆さん、わかつてもらえた？ 怪しげな薬はロクなことにならないそうでしょ？ でも強い魔物が出たらどうするんだ！ つて思う人もいるでしょ？ それは全員の力を底上げすればいいと思うんだ」

「底上げ……ですか？」

「うん。女性も男性もみんなが戦えるようにね。人数がいれば狩りもしやすくなるし、狩れる魔物も増える。狩れる魔物が増えれば売れる素材も増える。そしてお肉いっぱい食べられるよ」

私の言葉で男性陣は表情を明るくしたものの、女性陣は乗り気ではないらしい。まあ、今まで守ってもらった人が、いきなり戦えって言われたら困るよね。ここはもう一押し必要か。

「鍛えておけばとっさのとき身を守る護身術にもなるだろうし、新陳代謝も上がる。体つきが締まったり、肌がキレイになったり……今より若く美しく見られる人が増えるんじゃないかな？」

「「まあ！」」

おぼさま方を中心に、さつき不満げだったお姉さん達まで瞳に力が入ったのがわかった。

(チョロい。チョロすぎる！ この村の人達、こんなにチョロくて大丈夫かな？)

なんて心の中でパパ達に質問しちゃうくらい村人の素直さに驚きです。

「村の者を助けていただいただけでなく、魔物退治まで。さらには村をまとめていただき本当にありがたうございます」

「部外者があんまり口出さない方がいいんだろうけど……毒薬の件で村人の間に亀裂が入るのも嫌だったからさ。ごめんね？」

「とんでもない！ 以前よりも村がひとつになった気がします」

さて、大々的に村の問題に首突っ込んだのは解決したっぽいし、そろそろ私は目的のものをゲットしたいところである。

「村長、今の畑にあるやつ、私が欲しい枝豆だったら収穫させてもらってもいい？」

「セナ様のお望みでしたら構いません。重労働ですので、村の人間に手伝わせましょう」

「いや、だいじょ——」

「声かければすぐだぞ。おーい、村長から話があるってよ！」

私が言い終わる前にお兄さんが村人からの注目を集めたため、厚意を断れなくなりました。スルーされたことをクラオルとグレウスがスリスリと慰めてくれる。優しい。気持ちいい。

門番さんを先頭にゾロゾロと畑に向かうと、どこからどう見ても枝豆畑だった。

「ふあ〜！ たわわに実ってる〜!! 大豊作じゃーん！」

たわまないから間違いかもしれないけど、いっぱい実ってるって意味では合ってるからいいよね。鑑定してもやつぱり枝豆。火を通せば毒抜きできるって。最高だな！

「村長、どれくらいまでなら売ってくれる!?」

「え、えつと……」

「……本当にコレ食うのか？」

私の期待に満ちた眼差しを受けて、村長がしどろもどろになっている横から門番さんが胡乱げに聞いてきた。

「もちろん。超美味しいんだから！ —— ああつ、ダメ！」

「わっ！」

私が自信満々に言ったせいで、近くにいたちびっ子が鞘ごと食べようとしたのを叩き落とす。

「ごめん、ごめん。痛かったね。コレは生で食べたら毒なんだよ」
「え……どく？」

「そう。茹でたり炒めたりして火を通さないとダメなんだ。逆を言えば火を通せば食べられるの。だから食べたいときは大人に調理してもらった後ね。わかったかな？」

「うん、わかった！」

素直に返事をしてくれたちびっ子を「エライね〜」と撫でてあげると、頬を染めて照れていた。
「なるほど……火を通せば食べられるんですね」

「そうそう。で、どれくらいなら買い取って大丈夫なの？」

「そうですね……この状態のソイ豆の調理法を教えていただけのなら全てでも構いません」
「本当!？」

「はい。ですが、村人総出で収穫しても三日ほどかかるかと」

どうやって収穫するのか聞いてみると、普通に根っこごと引っこ抜いているとのこと。それなら抜く作業よりも鞆取り作業を手伝ってもらいたい。

「引っこ抜くのは魔法でやってもいい？」

「え、ええ……構いませんが……」

「グレウス、お願いしてもいい？」

『はいっ!』

シユタツと手を上げたグレウスは肩から地面に下り、枝豆畑だけポコポコと波打たせる。魔法の

使い方が上手いようで、根っこもキレイに地面から出ていた。褒めちぎったのは言うまでもない。

続いて私が風魔法で枝豆の根っこを切り落とし、ジルベルト君が小分けにした枝豆の枝の束をクラオルとポラルにまとめてもらう。切り落としした根っこをグレンに燃やして灰にしてもらい、灰を畑に撒いて元通りにしたら収穫作業の終わりだ。

「みんなありがとう! ってあれ？」

振り返ったら村人が揃ってポカーンと口を開けていたことに首を傾げる。

「これだけの畑を一瞬で……セナ様は商人ではなかったんですか？」

「冒険者でもあるけど商人だよ。ギルドカード見せたでしょ？」

「そうですね……確かにそうでした……」

「他の畑もやっちゃっていい? 手伝ってくれるなら別のことをお願いしたいな」

「は、はい。かしこまりました。なんなりと!」

いや、そんな構えるほどの作業じゃないから安心してくれ。

鞆取りのやり方を教えると、「ぼくもやる!」と先ほどの子を筆頭にちびっ子達も手伝ってくれた。
全ての畑の枝豆を収穫して鞆取りしたら、残った枝などは燃やして畑に撒いておく。大量の枝豆

が手に入って私は大満足だ。

「セナ様、なぜ灰を畑に撒いたのですか？」

「ああ、それは灰が土の栄養になるからだよ」

「栄養、でございますか？」

「そうそう。簡単に言うとうと土のご飯だね。栄養があれば成長も早くなるし、実も大きく育つの。モウ牛とか家畜の糞を撒くのもいいって聞くよ。さて、収穫も終わったし戻ろうか」

何やらブツブツ呟いている村長を促し、大豆保管倉庫へ。選別したほとんどの大豆も確保できて私はホクホクだ。

「セナ様、緑のソイ豆……エダ豆の調理法を教えてくださいてもよろしいでしょうか？」

「はい。みんなに教えた方がいいよね？ 村長の家の前が一番広いからそこで実演するよ」

「えっと……」

「教えるから村人達を集めてもらえるかな？」

「かしこまりました」

実演がなんなのかよくわかっていなさそうな村長は私に言われるがまま、足早に村人を呼びに行った。門番さんと共に少し遅れて村長宅に向かうと、すでにほとんどの住民が集まっていた。

「あれ、早いね。ちよつと待ってね。……よし、これから枝豆の茹で方の説明をします！」

村人達は食べられないと思っていたものが食べられると興味津々らしい。

出したコンロと鍋で説明しながら実演していく。一番オーソドックスな塩茹でしたものを試食用に配ると、みんなおっかなびっくり食べていた。ペペロンチーノ風の炒め物も作り、最後はずんだ餡。お餅が欲しかったけど、白玉粉もち米もないので餡だけ。砂糖を入れたとき小さく悲鳴が上がった。おそらく、スイーツになることが想像できなかったんだろうな。

「できた。これも食べてみて」

「さすがセナだな！ 美味い！ おかわりは？」

試食用に渡したずんだ餡をすぐに食べたのであろうグレンが感想をくれた。グレンのおねだりを聞いた村人達もおそろおそろの口に入れていく。

「こんなおいしいのはじめてー！」

「おいしいー！ ママも作れる？ もつとたべたいー！」

子供達は甘いものが好きみたいで、親の分を寄越せとねだっている。微笑ましい。

「こんなにも美味しいものだったのですね……ソイ豆よりこのエダ豆の方が美味しいなんて思ってもおりませんでした」

「ん？ だい……ソイ豆も美味しいじゃん」

「腹持ちはよいですが、硬くてあまり……」

「もしかして……そのまま食べてる？」

「はい。あれも何か調理法があるんですか？」

なるほど。だから非常食扱いだったのか……そりゃ乾燥大豆そのまま食べたら美味しくないよ。この世界の大きい具合を考えると大量に乾燥大豆を食べてることでしょ？ よくおなか壊さなかつたね？ 大豆のふやかし方教えた方がよさそう。

「なア、ソイ豆も美味くなるのか？」

「ソイ豆はふやかしてからじゃないと美味しくないと思う。それが好きなら止めないけど……へ!？」

門番さんに答えたらいきなり頭を下げられた。なんで!?

「ソイ豆の調理方法も教えてほしい。ソイ豆は案内した倉庫だけじゃなく、各家庭でも保存している。ソイ豆の調理方法も教えてもらえれば、この先飢えずに済むんだ。頼む」

目を剥く私に説いた門番さんは再び頭を下げた。それに倣うかのように村人達まで。

「えっと、そんな頭下げなくても教えてあげるから安心して。今から説明するよ。まず……」

大豆を戻す際に準備しなきゃいけないものから説明していく。水を吸収させている間待たせることになっちゃうので、今回は時短方法として熱湯に浸けて蓋をする方法をとった。空間魔法で時間を進めてもよかつたんだけど……エルミスに《村人には刺激が強い》って止められちゃったので。

その大豆を使って簡単塩スープを作る。大豆の他にこの村で手に入る卵、出汁用に干し肉しか入っていないスープである。それでも村人の目はスープに釘付けだった。

「各家庭で作るスープに、こんな感じで大豆を入れるの。大人はコシヨウを効かせても美味しいよ。あ、これ入れる容器持つてきてくれる? コップでもいいんだけど」

「自分家からスープ入れられるモン一つ持つてこい!」

最初は反応が鈍かったのに、門番さんの大声に十人以上が弾かれたように走り去っていった。一番は村長。そりゃ家の目の前なんだから速いよね。

「はい、どぞ。試しに飲んでみてね」

戻ってきた人から順番にスープを注いでいく。私が作ったのは寸胴鍋一杯分。一人一杯には足りないけど、村人はケンカすることもなく平等に飲んでいった。助け合いが根付いているらしい。

村人はもう飢えなくていいと大喜びで、買い取る予定だった枝豆と大豆はタダでもらえることになった。一応粘ったんだよ。私が買い取ったお金で街で買い物すればいいとか、また手に負えない魔物が出たときにギルドに依頼するお金になるよとか……粘ったものの、一致団結して「恩人からお金なんていただけません!」なんて断固拒否されたらお手上げであります。在庫がなくなったら買いたいので、そのときは絶対買い取るんだからね!



押し切られる形でもう一泊となり、朝食後に村長に出発の挨拶に行く……村人からプレゼントがあると村長に連れ出された。

「枝豆もソイ豆も結局もちっちゃったのに」

「セナ様には村の窮地を助けていただきました。セナ様がいなければ、この村は滅びの一途を辿ることになったでしょう。さらにソイ豆とエダ豆の調理法まで……もう飢える恐れがないのです」

「毒はやバかったかもしれないけど……」

「ぜひ我々からの気持ちを受け取ってください」

「負担になりそうなら受け取れないよ?」

村長と話しつつ歩いていると、お兄さんがいた。案内役が村長からお兄さんに交代するみたい。

「よう! こっちだ。オレたちからのお礼だぜ。受け取ってくれよな」